

平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡

平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和51年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、公共職業安定所新築工事に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

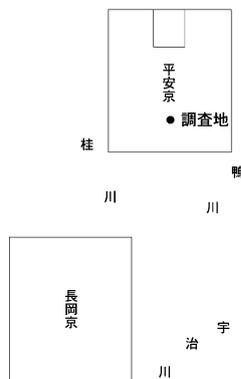
平成21年6月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡
- 2 調査所在地 京都市下京区朱雀正会町地内1－20
- 3 委 託 者 支出負担行為担当官 近畿地方整備局長 木下誠也
- 4 調査期間 2009年3月9日～2009年4月30日
- 5 調査面積 355 m²
- 6 調査担当者 小檜山一良・尾藤徳行
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。
- 13 本書作成 小檜山一良・尾藤徳行
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 位置と環境	3
(1) 位置と歴史的環境	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺構の概要	9
(3) 遺構	13
4. 遺 物	17
(1) 出土遺物の概要	17
(2) 土器類	18
(3) 瓦類	20
(4) その他の遺物	21
5. ま と め	22
(1) 遺構の変遷	22
(2) 平安京内の弥生時代遺跡について	23

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（南西から）
		2	第2面全景（南西から）
図版2	遺構	1	井戸14（東から）
		2	溝12（西から）
図版3	遺構	1	溝17（南から）
		2	土坑32（北東から）
図版4	遺物		出土土器・軒瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区と四行八門制（1：1,500）	2
図3	調査区配置図（1：800）	2
図4	調査前全景（南から）	3
図5	作業風景（北西から）	3
図6	既往調査位置図（1：5,000）	4
図7	調査区西壁・南壁断面図（1：100）	10
図8	調査区北壁・中央セクション断面図（1：100）	11
図9	調査区遺構平面図（1：200）	12
図10	盛土層7（南から）	13
図11	溝12遺物出土状況（南西から）	13
図12	溝12断面図（1：40）	13
図13	井戸14実測図（1：40）	14
図14	弥生時代遺構実測図（1：80、1：40）	15
図15	落込み34・溝17出土土器実測図（1：4）	18
図16	落込み34・溝17出土土器	18
図17	溝12出土土器実測図（1：4）	19
図18	土坑6・井戸14・盛土層7出土土器実測図（1：4）	19
図19	第1層出土色絵急須	20
図20	出土軒瓦拓影・実測図（1：4）	20
図21	溝12出土石製品・金属製品実測図（1：4、1：2）	21
図22	平安京域内弥生遺跡分布図	24

表 目 次

表1	周辺既往調査一覧表	5
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	17
表4	掲載土器観察表	26

平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

この調査は、京都七条公共職業安定所千本労働分室新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地は、京都市下京区朱雀正会町に位置し、平安時代には平安京左京七条一坊四町跡の西部、東鴻臚館にあたる。また、桃山時代には都を囲む御土居跡にもあたる。

調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導のもと、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

これまでに朱雀大路を挟んだ当地の西側にあたる右京七条一坊四町跡では、平安時代の溝、鎌倉時代の溝・柱穴・土坑・井戸、室町時代の溝、桃山時代から江戸時代の御土居盛土と濠、江戸時代から近代の土坑・溝・井戸など多くの遺構が検出されている。これらを参考にし、今回の調査では、当地における平安時代から江戸時代の土地利用の実態を示す遺構の状況を把握することを主目的とした。

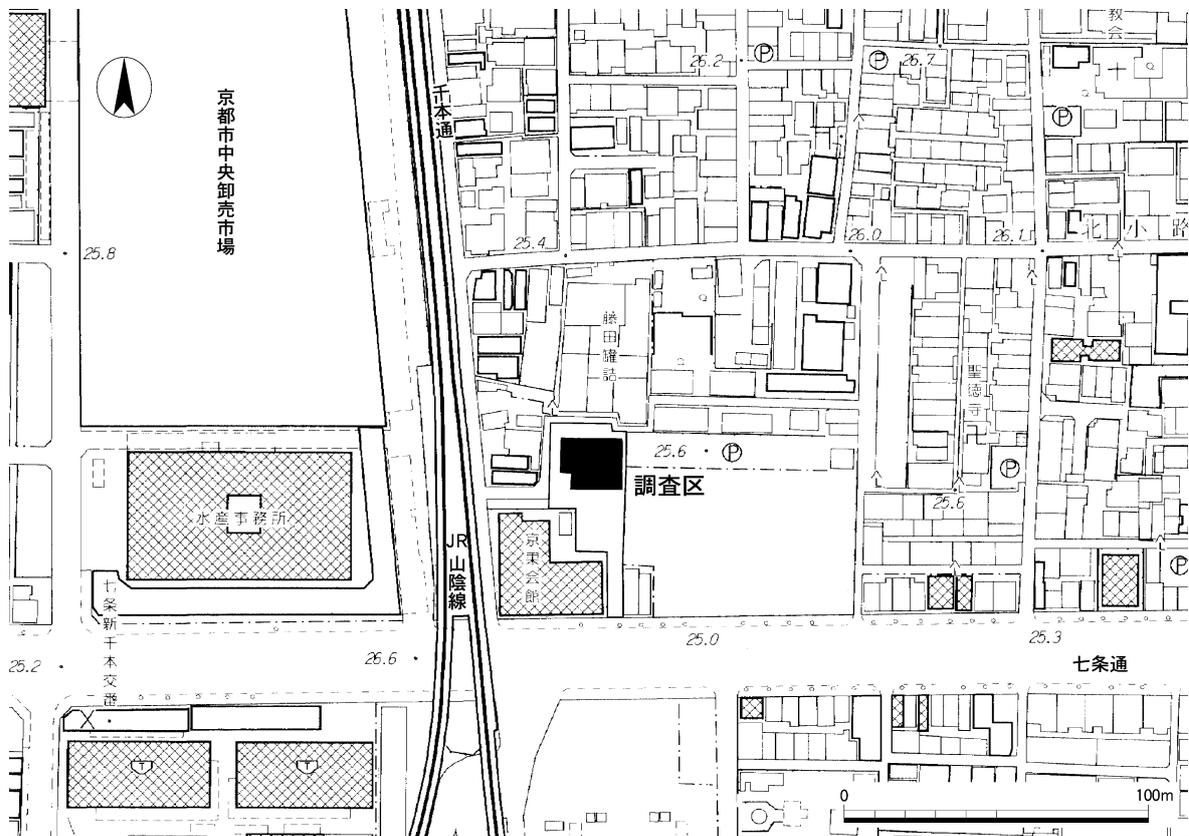


図1 調査位置図 (1:2,500)

(2) 調査の経過

調査区は、隣地境界との関係から、文化財保護課との協議のうえ、建築範囲から若干西寄りに設定し、東西約 21 m・南北約 18 m、面積約 355 m²とした。

はじめに、重機を使用して遺構面まで掘下げを行い、排土は 4t ダンプトラックで順次場外に搬出した。その後、人力での遺構調査を進めた。調査区の北部中央部では良好な遺構面を検出することができたが、それ以外は後世の攪乱により削平され、深い遺構のみが残存していた。

遺構面の調査は、2面行った。第1面では、江戸時代の土坑、室町時代の遺物を包含する盛土層を検出した。次いで第2面では、平安時代末から鎌倉時代初頭の井戸・柱穴・大規模な溝があり、さらに弥生時代中期の土坑・溝、前期の落込みを検出した。

調査の進行にあわせて、これらの遺構の写真撮影・実測図作成などの記録作業を行った。さらに下層遺構の有無と堆積状況の確認をするため、調査区の西・南壁沿いと北部で東西方向に断割りを行い、土層断面図を作成した。その後埋戻しを行い、フェンスを復旧して、全ての作業を終了した。

調査の進行に伴い、3月13・23日、4月8・24日の4回にわたり文化財保護課の指導を受けた。

なお、4月18日には現地説明会を実施し、平安時代末から鎌倉時代初頭の宅地に関連する遺構・弥生時代の土坑や溝などの発掘成果を公開し、あわせて出土遺物の展示などを行った。参加者は約 250 名であった。

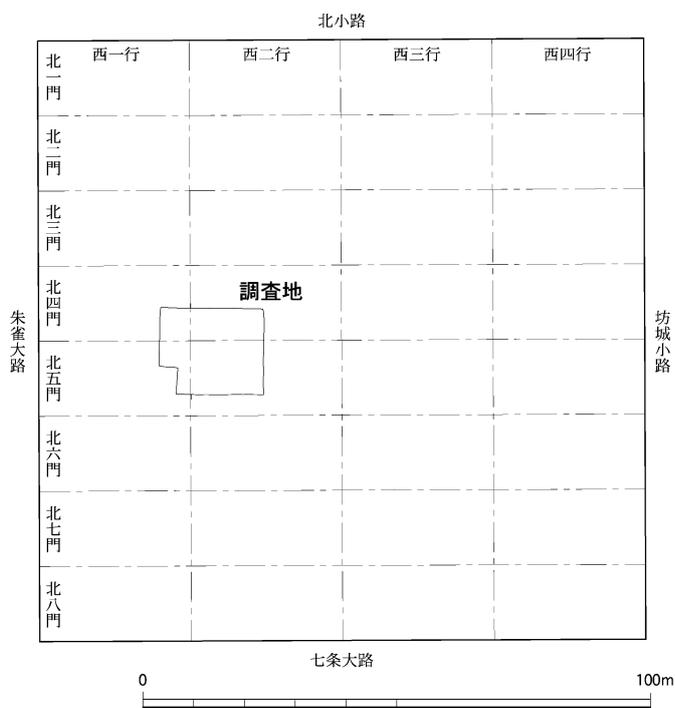


図2 調査区と四行八門制 (1 : 1,500)

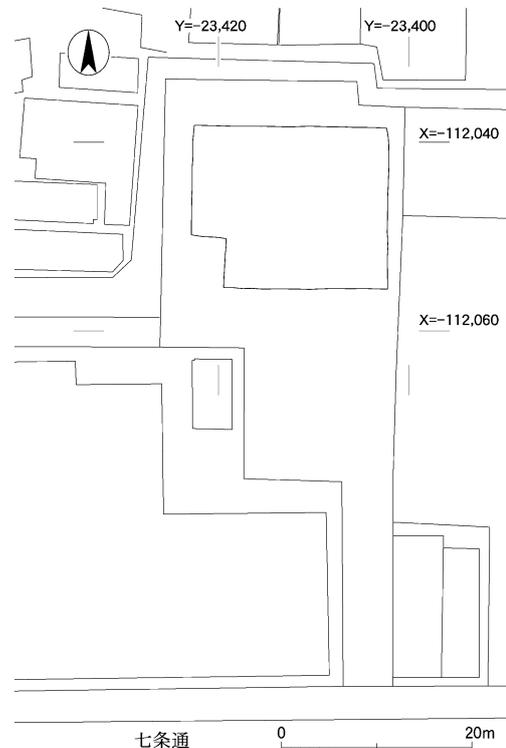


図3 調査配置図 (1 : 800)

2. 位置と環境

(1) 位置と歴史的環境

調査地は、平安京左京七条一坊四町跡の中央西部にあたる。また、調査地周辺における平安時代以前の遺跡としては、北西方向約 100 m に古墳時代から奈良時代の散布地である堂ノ口町遺跡、また、西方向約 400 m に弥生時代から古墳時代の散布地とされる衣田町遺跡などの遺跡が分布する。

調査地の西側には朱雀大路、東側には坊城小路が南北方向に延長し、北側には北小路、南側には七条大路が東西方向に延長する。また、四町内における調査地の位置を四行八門制で表せば、西一・二行、北四・五門に相当する。この四町は、『拾芥抄』東京図によると、平安時代前期には北接する三町とともに「東鴻臚館」とされている。承和六年（839）に東鴻臚館は廃止され、跡地は典薬寮へと所管替えされ、薬草園（御薬園）が作られたらしい。

室町時代には、この辺り一帯は朱雀村と呼ばれた。また、桃山時代には当地に豊臣秀吉による御土居が南北方向に築造された。御土居推定復元図によれば、調査区は御土居堤部分にあっている。

江戸時代の様子は、『都名所図絵』に描かれており、七条通と千本通の交差する地点を中心に集落があり、藁葺き屋根の間に瓦屋根が交じる様子がみとれる。村には旅籠・煮売・茶店などが多くあったことが『山城名跡巡行志』に記されており、朱雀村は丹波方面への街道である丹波街道沿いにあたり、洛中と洛外の境界であった。

明治時代には、『京都府地誌』によると、朱雀村で水菜・芋・瓜・藍・菜類などの物産が産出するとされている。昭和 2 年には、山陰本線の西側に、京都市中央卸売市場が設置された。昭和 9 年には、この地に公共職業安定所の前身施設が設置された。

(2) 既往の調査

調査地周辺では、これまでに発掘調査・試掘調査・立会調査が実施され、その成果が報告されている。それらの調査成果を表 1 にまとめ、図 6 に調査地点を記した。ここでは、本調査地周辺



図 4 調査前全景（南から）



図 5 作業風景（北西から）

の概要を述べる。

調査1（2000年試掘調査）左京七条一坊二町跡にあたる。平安時代後期の南北溝2条と土坑が検出されている。遺物は、平安時代後期の土師器・瓦器などの土器類と剣頭文軒平瓦を含む瓦類がある。2条の南北溝は、坊城小路の推定位置に該当するが、両溝の間隔が6mしかないことや、出土遺物が平安時代後期であることから、坊城小路には関連しないとみられている¹⁾。

調査2（2000年発掘調査）左京七条一坊八町跡にあたる。弥生時代前期の流路、中世の小溝、江戸時代から近代の井戸・穴蔵・土坑・柱穴・溝・池状泥土堆積が検出されている。遺物は、弥生土器（壺・甕）、平安時代の緑釉陶器・平瓦、江戸時代の土師器・陶器・磁器・銭貨・金属製品、近代の陶磁器・金属製品が出土している。平安時代の遺構は確認できなかったが、弥生時代前期

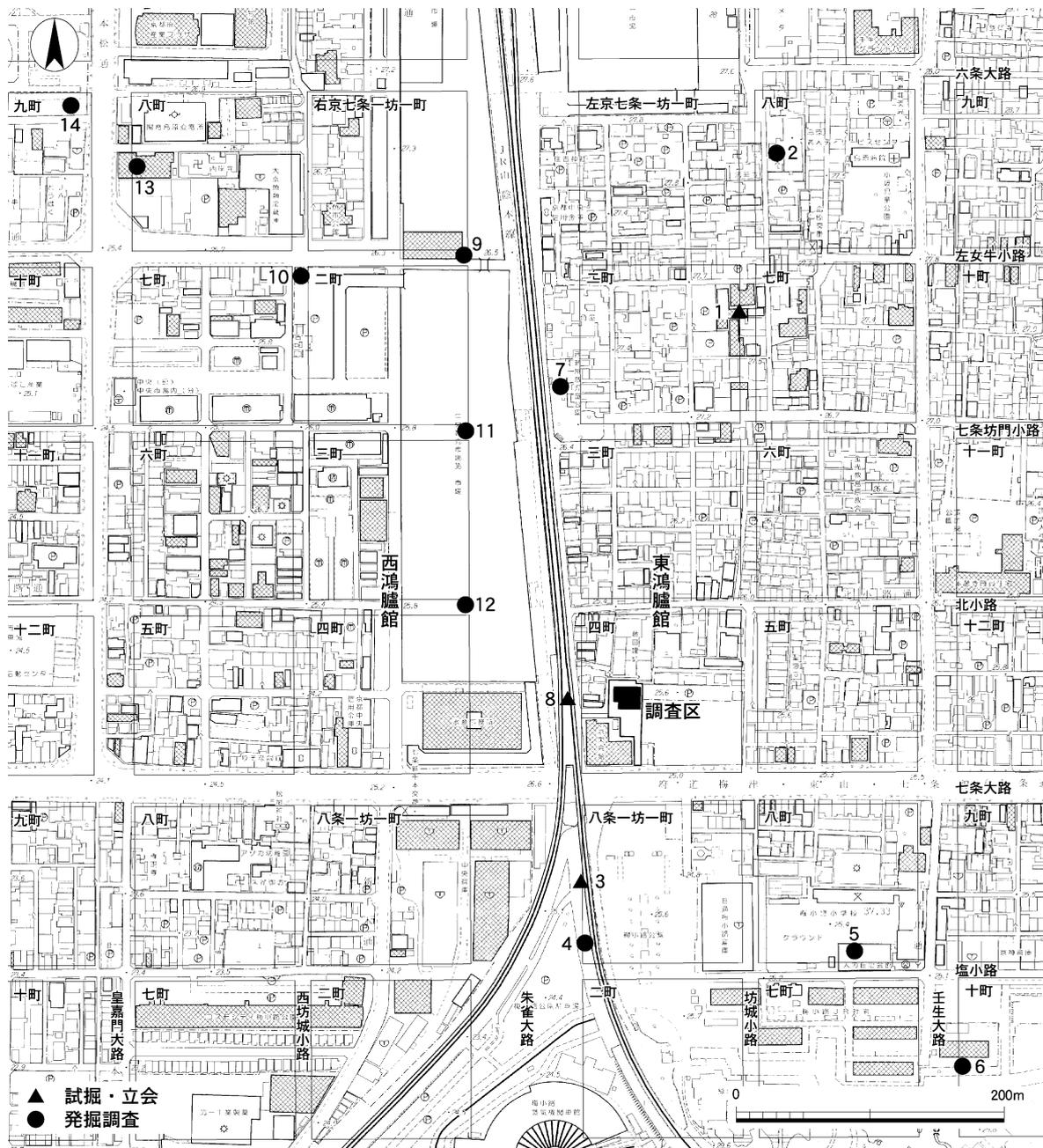


図6 既往調査位置図（1：5,000）

表1 周辺既往調査一覧表

No.	遺跡名	方法	所在地	遺構	遺物	文献
1	左京七条一坊二町	試掘	下京区西新屋敷上之町128	平安時代後期の南北溝、小土坑。	平安時代後期の土師器、瓦器、軒瓦、瓦。	註1
2	左京七条一坊八町	発掘	下京区西新屋敷中之町103-2	弥生時代前期の流路。中世の小溝。江戸時代～近代の井戸、穴蔵、土坑、柱穴、溝、池状泥土堆積。	弥生時代前期の弥生土器（壺・甕）。平安時代の緑釉陶器、平瓦。江戸時代の土師器、陶器、磁器、銭貨、金属製品。近代の陶器、磁器、金属製品。	註2
3	左京八条一坊一町・御土居跡	試掘	下京区観喜寺町	江戸時代の濠。	江戸時代の国産磁器。	註3
4	左京八条一坊一町・御土居跡	発掘	下京区観喜寺町	江戸時代～明治の濠。	江戸時代～明治の陶器、白磁、染付。	註4
5	左京八条一坊八町	発掘	下京区歓喜寺町3（大内小学校）	平安時代？鎌倉時代の井戸、土坑。近世の土取り穴。	平安時代の土師器、須恵器、瓦器、白磁。鎌倉時代の土師器、青磁、白磁、鉄彩（吉州窯）。近世の陶器、染付。	註5
6	左京八条一坊十町	発掘	下京区観喜寺町（旧国鉄用地）	平安時代前期～中期の壬生大路東側溝、土坑。近世の溝、土坑。地山は黄茶色砂礫。	弥生時代後期の弥生土器（壺・甕）。古墳時代中期の須恵器（壺・甕・蓋）、土師器甕。平安時代前期？中期の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、石帯。近世の染付陶器、施釉陶器片。	註6
7	朱雀大路	発掘	下京区揚屋町	中世～近世の溝、江戸時代末期の堀。	中世の土師器、須恵器、瓦類。江戸時代～明治の土師器、施釉陶器、焼締陶器、土製品、染付、青磁、木製品、金属製品。	註7
8	朱雀大路	立会	下京区朱雀正会町	地表下2m以下に近世の遺物包含層。	近世の陶磁器。	註7
9	右京七条一坊一町	発掘	下京区朱雀分木町（中央市場）	平安時代後期の左女牛小路西側溝、朱雀大路西側溝。江戸時代後期の土取り穴。	平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、白磁、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦。	註8
10	右京七条一坊二町・西坊城小路	発掘	下京区朱雀分木町（中央市場）	平安時代の西坊城小路東側溝、柱穴。安土桃山時代の土坑。江戸時代の土坑。時期不明の柱穴。	平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製磁器、獣骨。平安時代～鎌倉時代の温石。鎌倉時代～室町時代の土師器、中世須恵器、瓦器、中国製磁器。江戸時代の国産磁器、施釉陶器、鉄釘。	註9
11	右京七条一坊二・三町	発掘	下京区朱雀分木町（中央市場）	古墳時代の流路。奈良時代の井戸、流路。平安時代の朱雀大路西側溝、路面、七条坊門小路北側溝。中世？近世の井戸、溝、御土居濠。	古墳時代の土師器、須恵器。奈良時代の土師器、須恵器。平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類、銅銭、人形、輸入陶磁器（長沙窯）。	註10
12	右京七条一坊四町	発掘	下京区朱雀堂ノ口町（中央市場）	平安時代前期の溝。平安時代中期～後期の朱雀大路西側溝。平安時代後期～鎌倉時代の溝、柱跡多数、土坑、井戸、柵列。室町時代の溝。桃山時代の御土居。桃山時代～江戸時代の御土居濠、溝。江戸時代～近代の土坑、溝、井戸多数。	縄文時代中期の縄文土器（深鉢）。弥生時代前期の弥生土器（鉢・壺）、石包丁。古墳時代の土師器（甕・壺・高杯）。平安時代以降の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、軒丸瓦、軒平瓦、文字瓦、瓦、輸入陶磁器、銭貨、金属製品、木製品、石製品。近代の人骨、獣骨。	註11
13	右京七条一坊八町	発掘	下京区朱雀分木町47	平安時代前期の皇嘉門大路東側溝、築地溝、掘立柱建物。室町時代の土坑。	平安時代前期の土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、輸入陶磁器。	註12
14	右京七条一坊九町	発掘	下京区中堂寺栗田町93・94	時期不明の流路。鎌倉・室町時代の六条大路路面。近・現代の溝、土坑、湿地。	平安時代の土師器、須恵器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦。鎌倉・室町時代の土師器、瓦器。近・現代の陶磁器。	註13

の流路を検出している²⁾。

調査3（2006年試掘調査）左京八条一坊一町跡にあたる。江戸時代の濠が検出されている。遺物には、江戸時代の国産磁器がある。御土居濠の東肩部にあたる。御土居濠の規模は、東西幅約14 m、深さ1.8 m以上と推定される³⁾。

調査4（2006年発掘調査）左京八条一坊一町跡にあたる。江戸時代から明治時代の濠が検出されている。遺物には、江戸時代から明治時代の陶器・白磁・染付がある。御土居濠の西肩部にあたり、御土居濠が最終的に埋没したのは、山陰線が敷設された時期であるとみられる⁴⁾。

調査5（1986年発掘調査）左京八条一坊八町跡にあたる。平安時代から鎌倉時代の井戸・土坑、近世の土取り穴が検出されている。遺物は、平安時代の土師器・須恵器・瓦器・白磁、鎌倉時代の土師器・青磁・白磁・鉄彩陶器、近世の陶器・染付がある。近世の土取り穴のため遺構の遺存は良くないが、多量の輸入陶磁器が出土している⁵⁾。

調査6（1982年発掘調査）左京八条一坊十町跡にあたる。平安時代前期から中期の溝・土坑、近世の溝・土坑が検出されている。遺物は、弥生土器（壺・甕）、古墳時代の須恵器（壺・甕・蓋）・土師器甕、平安時代前期から中期の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・石帯、近世の染付・施釉陶器がある。検出した平安時代前期から中期の溝は、壬生大路東側溝と推定される。畿内V様式の壺・甕、古墳時代中期の壺・甕などが出土していることも注目される⁶⁾。

調査7（1976年発掘調査）朱雀大路跡にあたる。中世から近世の素掘りの溝、江戸時代末期の堀を検出している。遺物は、中世の土師器・須恵器・瓦類、江戸時代から明治時代の土師器・施釉陶器・焼締陶器・土製品・染付・青磁・木製品・金属製品などが出土している⁷⁾。

調査8（1975年立会調査）朱雀大路跡にあたる。地表下2 m以下に、近世の遺物を包含する黒灰色砂泥層を検出している。遺物は近世の陶磁器類が出土している。御土居の濠に推定されており、平安時代の遺構は削平されていた⁷⁾。

調査9（1986年発掘調査）右京七条一坊一町跡にあたる。平安時代後期の東西方向の溝2条・南北方向の溝1条、江戸時代後期の土取り穴を検出している。遺物は、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・輸入白磁・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。東西方向の2条の溝は左女牛小路の両側溝、南北方向の溝は朱雀大路の西側溝と推定される⁸⁾。

調査10（2007年発掘調査）右京七条一坊二町跡にあたる。平安時代の南北方向の溝・柱穴、桃山時代の土坑、江戸時代の土坑を検出している。遺物には、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器・温石、鎌倉時代から室町時代の土師器・須恵器・瓦器・輸入磁器、江戸時代の国産磁器・施釉陶器・鉄釘などがある。南北方向の溝は西坊城小路東側溝とみられる⁹⁾。

調査11（1984年発掘調査）右京七条一坊二・三町跡にあたる。古墳時代の流路、奈良時代の井戸・流路、平安時代の南北方向の溝・東西方向の溝・路面・柱穴、中世から近世の井戸・溝・濠を検出した。遺物には、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦類・銅銭・人形・輸入陶磁器などがある。古墳時代前期から奈良時代後期にかけての自然流路を検出したことにより、堂ノ口町遺跡として周知され

ることとなった。平安時代の南北方向溝と路面は朱雀大路西側溝および路面、さらに東西方向溝は七条坊門小路北側溝と推定される。朱雀大路側溝が七条坊門小路を横切る部分では、杭と矢板を使用した護岸施設を確認した。出土した多量の瓦は、西鴻臚館に関するものとみられる。また、中世から近世の濠は、御土居の濠と推定される¹⁰⁾。

調査 12 (1982 年発掘調査) 右京七条一坊四町跡にあたる。平安時代前期の南北方向の溝、平安時代中期から後期の南北方向の溝、平安時代後期から鎌倉時代の溝・柱穴・土坑・井戸・柵列、室町時代の溝、桃山時代から江戸時代の御土居盛土と濠・溝、江戸時代から近代の土坑・溝・井戸など多くの遺構を検出した。遺物には、縄文時代中期の甕、弥生時代前期の鉢・壺・石包丁、古墳時代の甕・壺・高杯、平安時代以降の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・瓦類・輸入陶磁器・銭貨・金属製品・木製品・石製品、近代の人骨・獣骨などがある。平安時代中期から後期の朱雀大路西側溝を南北 140 m にわたって検出した。西鴻臚館の推定地にあたり、出土した瓦の大半が搬入瓦であったことが注目された。桃山時代の御土居の盛土や濠も検出している¹¹⁾。

調査 13 (1983 年発掘調査) 右京七条一坊八町跡にあたる。平安時代前期の南北方向の溝 2 条・掘立柱建物 3 棟、室町時代の土坑を検出している。遺物には、平安時代前期の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦・輸入陶磁器などがある。検出した平安時代前期の南北方向の溝は、皇嘉門大路の東側溝に推定される。また、犬走り・築地基底・築地溝なども検出している¹²⁾。

調査 14 (2005 年発掘調査) 右京七条一坊九町跡にあたる。鎌倉時代から室町時代の路面、近代の溝・土坑・湿地などを検出している。遺物には、平安時代の土師器・須恵器・軒丸瓦・丸瓦・平瓦、鎌倉時代から室町時代の土師器・瓦器、近・現代の陶磁器がある。検出した鎌倉時代から室町時代の路面は、六条大路と考えられる¹³⁾。

註

- 1) 長谷川行孝「平安京左京七条一坊二町跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 12 年度』京都市文化市民局 2001 年
- 2) 永田宗秀・藤村敏之「平安京左京七条一坊」『平成 12 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 3) 吉村正親「平安京左京八条一坊一町跡・御土居 2」『平安京跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-18 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007 年
- 4) 津々池惣一「平安京左京八条一坊一町跡・御土居 1」『平安京跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-18 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007 年
- 5) 平尾政幸「平安京左京八条一坊」『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989 年
- 6) 磯部 勝「左京八条一坊」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984 年
- 7) 『平安京跡発掘調査報告 - 山陰線高架建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』山陰線高架化に伴う埋蔵

文化財発掘調査団 1976 年

- 8) 平尾政幸・加納敬二「平安京右京七条一坊」『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989 年
- 9) 内田好昭・加納敬二『平安京右京七条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007 年
- 10) 平尾政幸・本 弥八郎「平安京右京七条一坊」『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987 年
- 11) 平田 泰・吉川義彦・菅田 薫「右京七条一坊」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984 年
- 12) 本 弥八郎・菅田 薫「右京七条一坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和 58 年度』京都市文化観光局 1984 年
- 13) 平尾政幸『平安京右京七条一坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-12 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006 年

参考文献

- ・『京都市の地名』日本歴史地名大系第 27 巻 平凡社 1979 年
- ・(財)古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店 1994 年
- ・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編『京都市遺跡地図台帳 第 8 版』京都市文化市民局 2007 年

3. 遺 構

調査区の四周は、既存建物の基礎などによる近・現代の攪乱により、無遺物層である黄褐色シルト層や黄灰褐色砂礫層まで掘り下げられていた。特に調査区の南半分は、半地下状建物の基礎により、地表下約0.7 mまで攪乱が及んでいた。このため北部中央付近で、わずかに室町時代の遺物を包含する盛土層を検出したにとどまった。

次に、これら断片的な層序を合成して復元し、本調査区の基本層序について示す。

(1) 基本層序 (図7・8)

現代盛土層は、厚さ約0.15 mある。現代盛土層の下には、厚さ0.05～0.25 mの室町時代の遺物を包含する盛土層が堆積する。この下は、黄褐色シルト層または黄灰褐色砂礫層の無遺物層(地山)となる。これら地山の上面で、平安時代末期から鎌倉時代初期、弥生時代前期・中期の遺構を検出した。

(2) 遺構の概要

前述したように遺構は地山上面で検出しているが、検出時の遺構の重複状況を基に、ここでは便宜上、室町時代以降(第1-A面)、平安時代末期から鎌倉時代初期(第1-B面)、弥生時代(第2面)に分けて調査を実施した。

調査の結果、弥生時代から江戸時代に至る遺構を検出した。検出した主要な遺構には、弥生時代前期に属する落込み、弥生時代中期に属する溝・土坑、平安時代末期から鎌倉時代初期に属する溝・井戸・柱穴・土坑、室町時代の遺物を包含する盛土層、江戸時代後期の土坑などがある。

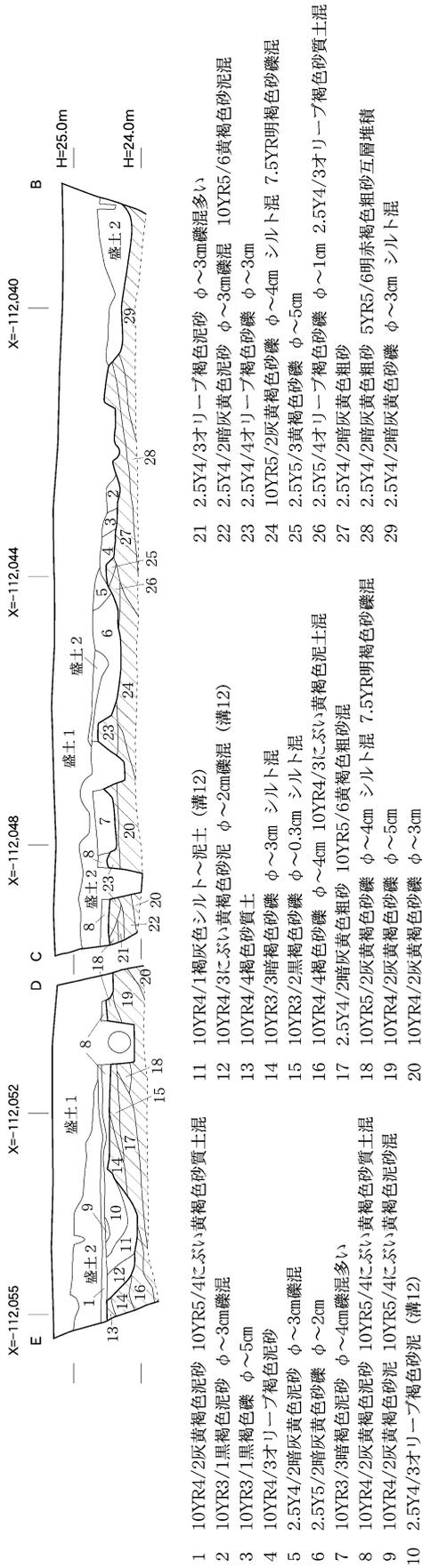
次に、検出した遺構の概要について、記述する。

なお、遺構の全景写真は、調査期間を考慮して、第1-A面・第1-B面で1回、第2面で1回の2回実施した。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代	土坑1	
桃山時代	盛土層7	御土居基底部とみられる
平安時代～鎌倉時代	溝12、井戸14、土坑6、柱穴	
弥生時代	溝17、土坑32、落込み34	溝と土坑は中期、落込みは前期

調査区西壁



調査区南壁

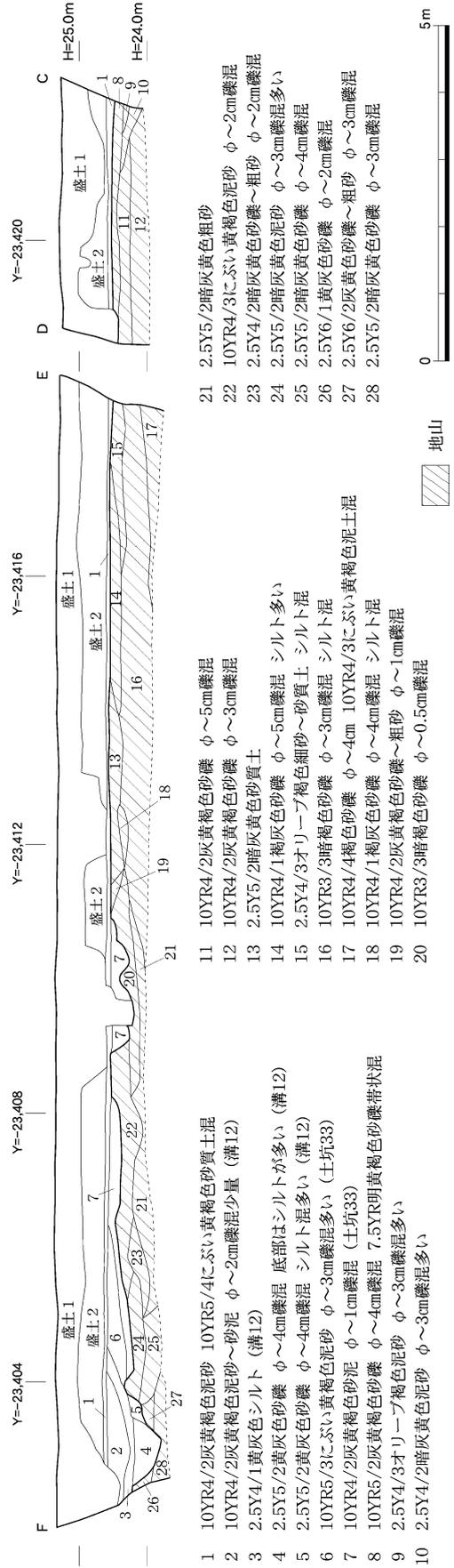
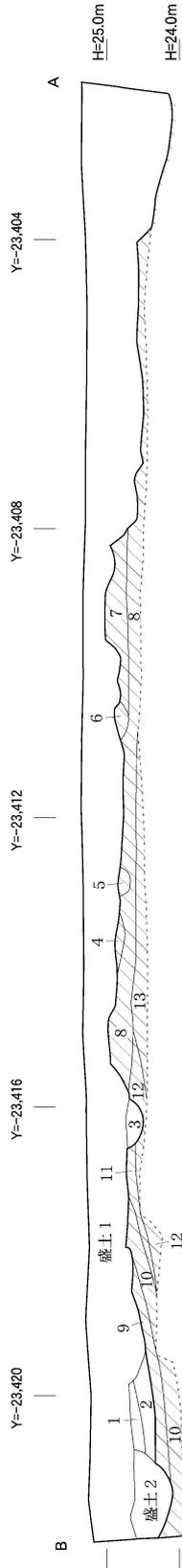


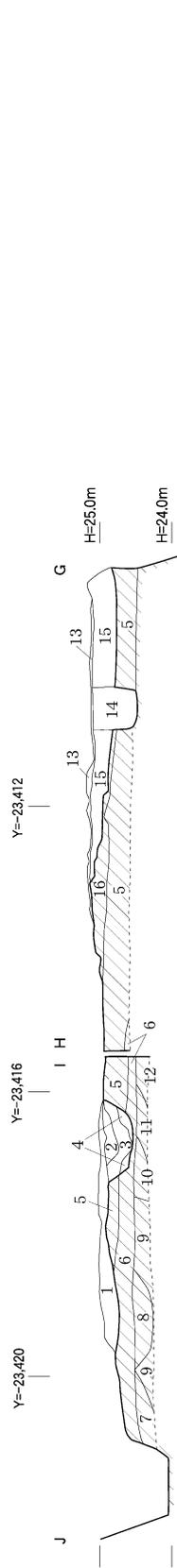
図7 調査区西壁・南壁断面図 (1:100)

調査区北壁



- | | |
|--|--|
| <p>1 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 φ~1cm シルト混</p> <p>2 2.5Y5/3黄褐色砂礫 φ~2cm</p> <p>3 10YR3/2黒褐色シルト 粗砂・φ~3cm礫混 (溝17)</p> <p>4 10YR4/2灰黄褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂混</p> <p>5 2.5Y4/2灰黄褐色シルト</p> <p>6 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト</p> <p>7 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 φ~2cm 細砂混</p> | <p>8 10YR4/2灰黄褐色砂礫 φ~4cm シルト混</p> <p>9 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 φ~3cm</p> <p>10 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 φ~3cm シルト混</p> <p>11 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 φ~0.5cm 10YR4/4褐色泥砂混</p> <p>12 10YR4/2灰黄褐色砂礫 φ~1cm 7.5YR4/4褐色泥砂混</p> <p>13 10YR3/2黒褐色砂礫 φ~5cm シルト混</p> |
|--|--|

中央セクション

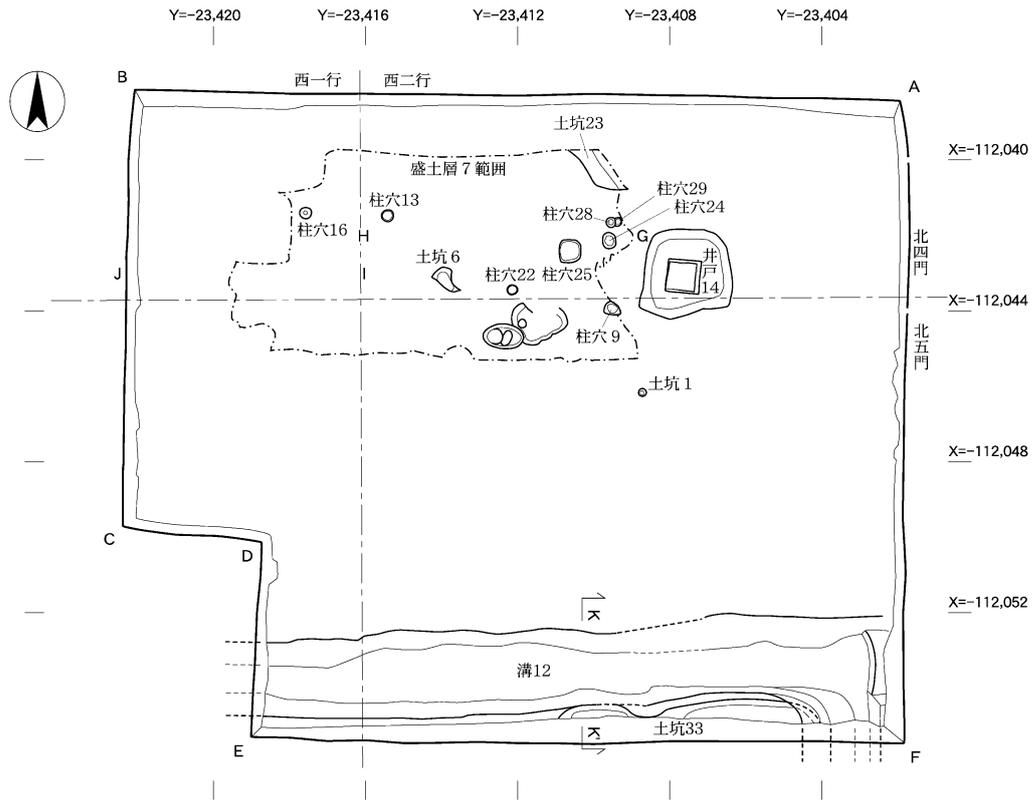


- | | |
|---|---|
| <p>1 2.5Y5/4黄褐色シルト (盛土層7)</p> <p>2 10YR4/2灰黄褐色シルト (溝17)</p> <p>3 10YR4/1褐灰色シルト 10YR4/4褐色シルト混 (溝17)</p> <p>4 10YR4/3にぶい黄灰色シルト 10YR4/6褐色シルト混 φ~3cm礫混多い (溝17)</p> <p>5 10YR4/2灰黄褐色砂礫 φ~5cm</p> <p>6 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 φ~0.5cm ~粗砂</p> <p>7 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 φ~0.2cm ~粗砂</p> <p>8 2.5Y4/2暗灰黄色暗灰黄色砂礫 φ~0.5cm ~粗砂 7.5YR5/8明褐色粗砂混</p> | <p>9 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 φ~3cm 10YR4/4褐色砂礫混</p> <p>10 10YR3/3暗褐色砂礫 φ~1cm 2.5Y5/4オリーブ褐色シルト混</p> <p>11 10YR3/2黒褐色砂礫 φ~1cm シルト混</p> <p>12 10YR3/3暗褐色砂礫 φ~2cm 10YR4/4褐色砂礫混</p> <p>13 10YR4/2灰黄褐色砂泥 小礫・炭混 (盛土層7)</p> <p>14 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (柱穴25)</p> <p>15 10YR3/3暗褐色シルト (土坑32)</p> <p>16 2.5Y5/4黄褐色シルト</p> |
|---|---|



図8 調査区北壁・中央セクション断面図 (1:100)

第1面



第2面

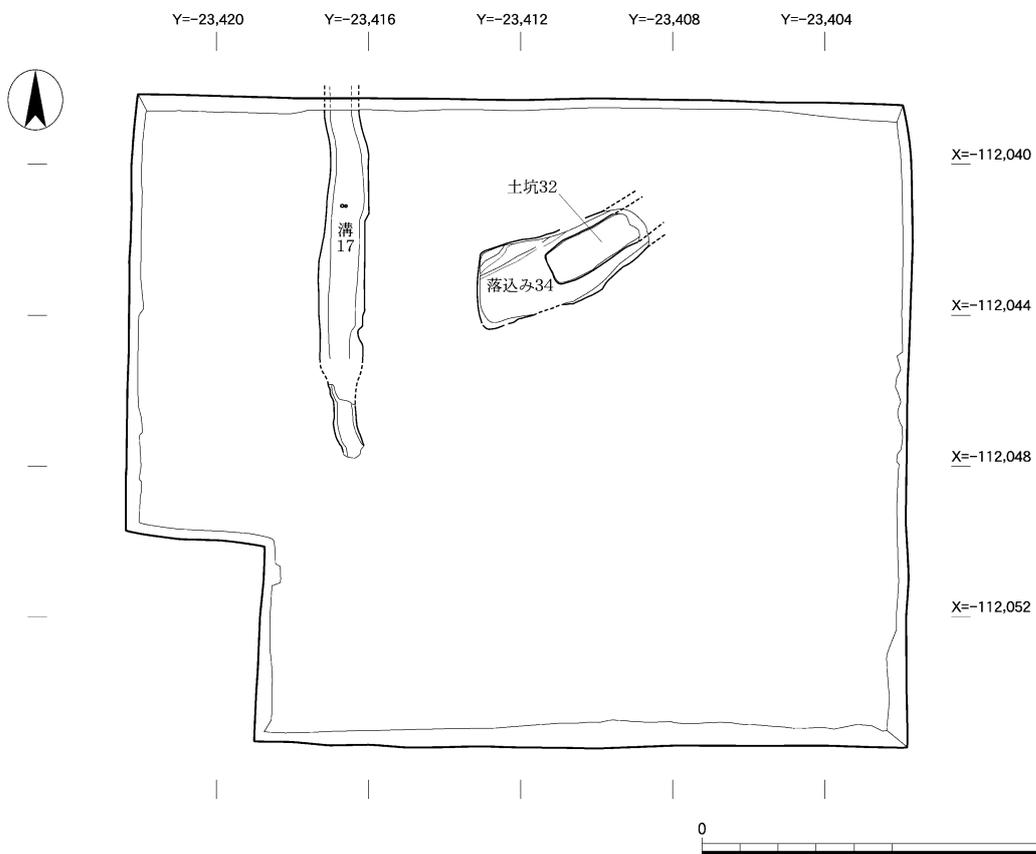


図9 調査区遺構平面図 (1 : 200)

(3) 遺構

1) 第1-A面の遺構 (図9、図版1)

室町時代の遺物を包含する盛土層やそれ以降の土坑などの遺構がある。土坑は江戸時代後期のものである。

土坑1 調査区の中央やや東寄りで検出した小規模な土坑である。直径は約0.2m、深さは約0.2mある。埋土は黒褐色泥砂を主体とする。江戸時代後期の土器類が出土した。

盛土層7 (図10) 調査区の北部で検出した盛土層である。確認した範囲は、東西約12m・南北約5mで、厚さは0.05～0.25mある。堆積土は黄褐色砂泥を主体として、炭化物や小石を多く含んでいる。土層の堆積は締まりが弱い。14世紀中頃までの土器類や瓦類を含む。遺物はいずれも小片になっている。



図10 盛土層7 (南から)

2) 第1-B面の遺構 (図9、図版1)

平安時代末期から鎌倉時代初期の遺構である。東西方向の溝・井戸・柱穴・土坑などがある。

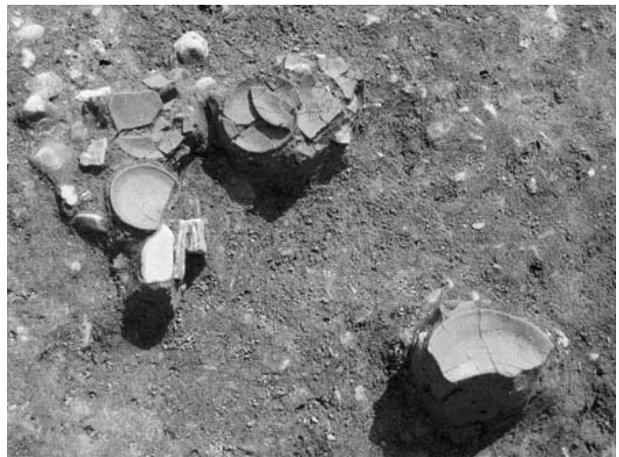


図11 溝12 遺物出土状況 (南西から)

溝12 (図11・12、図版2) 調査区南部で検出した東西方向の溝である。幅2.0～2.3m、深さ0.4～0.8mで、東西約16.5mにわたって検出した。調査区の東端で南折する。埋土は大まかに3期に分かれる。1期は4～7層、2期は3層、3期は1・2層である。3層は粘質の強い褐灰色シルト層で、この時期には水が溜まっていたことがわかる。1期では当初の南肩側の斜面が急傾斜となっている。溝の南肩付近では小型軒平瓦がまとまって出土した。北肩で

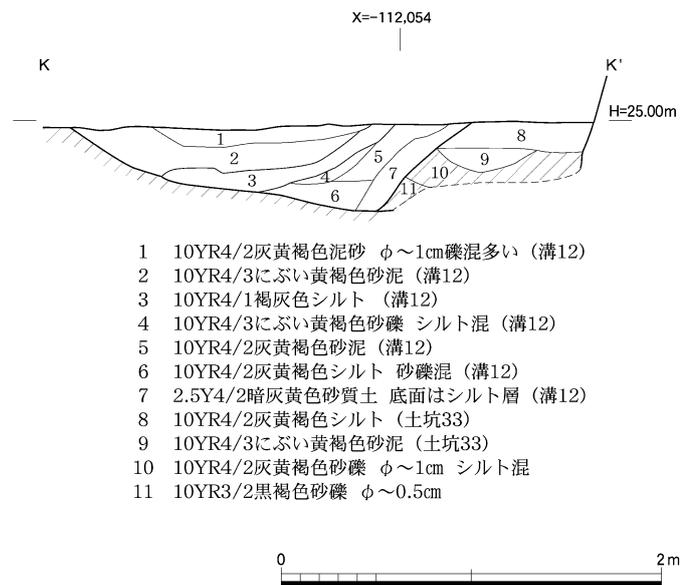
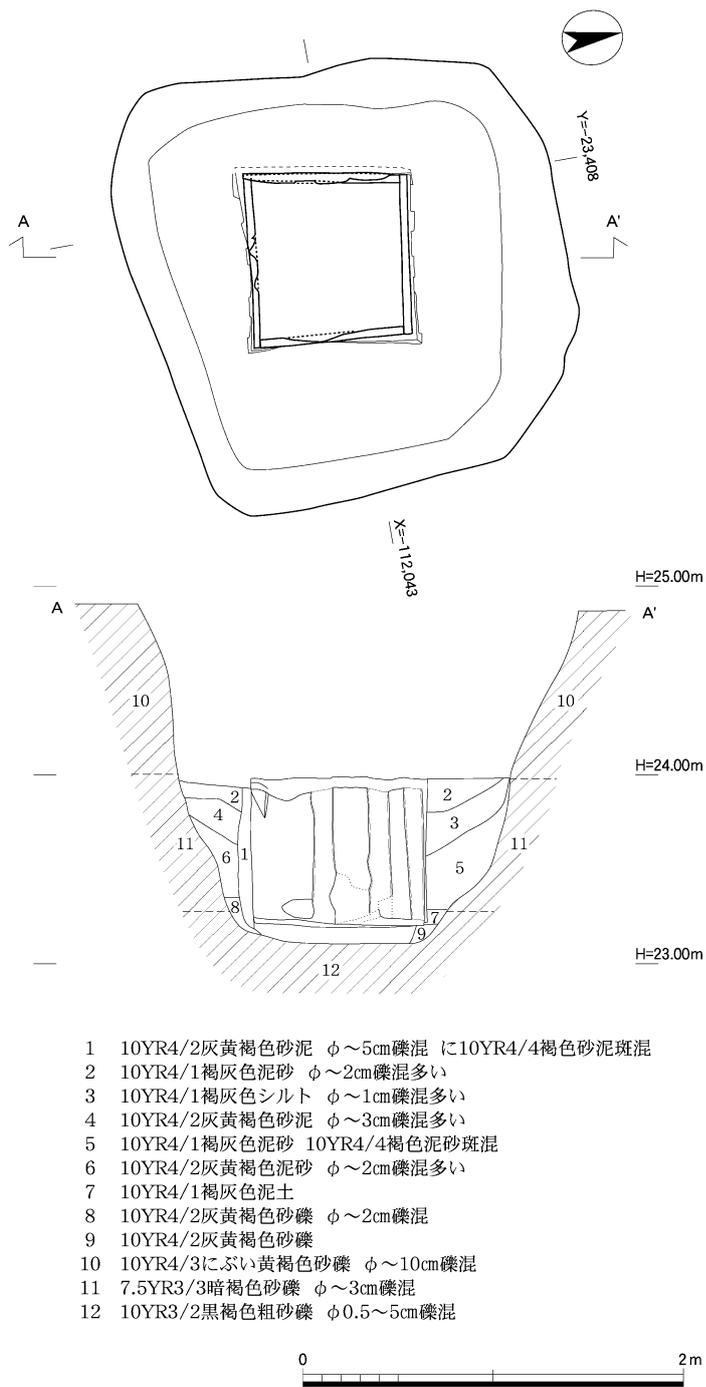


図12 溝12 断面図 (1:40)



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ~5cm礫混 に10YR4/4褐色砂泥斑混
- 2 10YR4/1褐灰色泥砂 φ~2cm礫混多い
- 3 10YR4/1褐灰色シルト φ~1cm礫混多い
- 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ~3cm礫混多い
- 5 10YR4/1褐灰色泥砂 10YR4/4褐色泥砂斑混
- 6 10YR4/2灰黄褐色泥砂 φ~2cm礫混多い
- 7 10YR4/1褐灰色泥土
- 8 10YR4/2灰黄褐色砂礫 φ~2cm礫混
- 9 10YR4/2灰黄褐色砂礫
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 φ~10cm礫混
- 11 7.5YR3/3暗褐色砂礫 φ~3cm礫混
- 12 10YR3/2黒褐色粗砂礫 φ0.5~5cm礫混

図13 井戸14実測図(1:40)

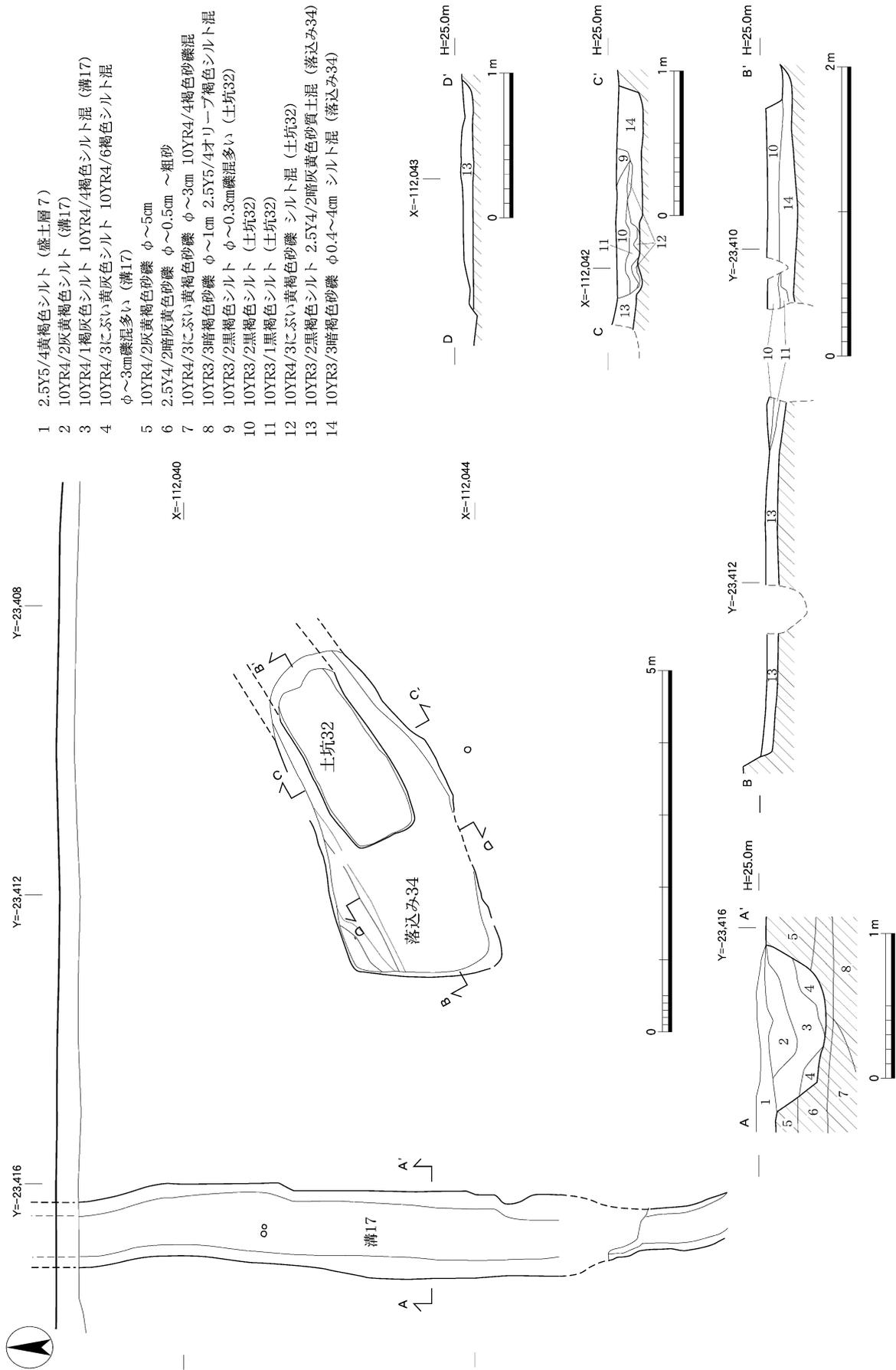
は、土師器皿が多く出土しており、ほぼ完形に復元できるものが多い。12世紀末～13世紀初頭に属する。検出した位置は、北四門・五門境の約10m南にあたる。

井戸14(図13、図版2)調査区北西部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形の平面形は一边が約1.5～2.2mの隅丸方形である。掘形検出面から0.9mの深さで井筒上部を検出した。井筒は一边が約0.9mで、木製の隅柱・縦板・横棧の構造である。しかし、部材の遺存は極めて不良で、底からの高さ約0.8mまでがかろうじて残存していた。掘形埋土は褐色泥砂で小礫が多く混じる。井筒内の埋土は暗褐色砂泥で、小礫や砂が多く混じる。埋土から12世紀末～13世紀初頭の遺物が出土し、9世紀代の遺物が若干混入している。

柱穴9・24 調査区北部で検出した柱穴で、井戸14の西1.5mに位置する。平面形は、径0.3～0.4m、深さ約0.4m、埋土は暗褐色泥砂である。1.8mの間隔で南北方向に並ぶ。埋土から12世紀末～13世紀初頭の遺物が出土した。

柱穴25 調査区北部で検出したやや大型の柱穴である。平面形は、径約0.6m、深さ約0.6m、埋土は暗褐色泥砂である。埋土から12世紀末～13世紀初頭の遺物が出土した。

土坑6 調査区北部で検出した土坑である。平面形は、長径約0.8mの楕円形を呈し、深さ約0.1m、埋土はオリーブ褐色泥砂である。埋土から12世紀末～13世紀初頭の遺物が出土した。



- 1 2.5Y5/4黄褐色シルト (盛土層7)
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト (溝17)
- 3 10YR4/1褐色シルト 10YR4/4褐色シルト混 (溝17)
- 4 10YR4/3にぶい黄灰色シルト 10YR4/6褐色シルト混
φ~3cm礫混多い (溝17)
- 5 10YR4/2灰黄褐色砂礫 φ~5cm
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 φ~0.5cm ~粗砂
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 φ~3cm 10YR4/4褐色砂礫混
- 8 10YR3/3暗褐色砂礫 φ~1cm 2.5Y5/4オリーブ褐色シルト混
- 9 10YR3/2黒褐色シルト φ~0.3cm礫混多い (土坑32)
- 10 10YR3/2黒褐色シルト (土坑32)
- 11 10YR3/1黒褐色シルト (土坑32)
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 シルト混 (土坑32)
- 13 10YR3/2黒褐色シルト 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土混 (落込み34)
- 14 10YR3/3暗褐色砂礫 φ0.4~4cm シルト混 (落込み34)

図14 弥生時代遺構実測図 (1:80、1:40)

3) 第2面の遺構(図9、図版1)

弥生時代中期と前期の遺構である。調査区北部の高く遺存している部分で検出した。

溝17(図14、図版3) 南北方向のほぼ直線的な溝であるが、南端は東折するとみられる。幅1.0～1.2 m、深さ0.3～0.5 mある。南北方向に約9 m分を検出した。さらに北に延びるとみられる。埋土は黒褐色砂泥である。溝内の上層から下層まで弥生時代中期の壺の体部や底部片が出土したが、まとまって一個体になるものはみられない。埋土中には弥生時代前期の土器類が混入する。

土坑32(図14、図版3) 溝17の東5 mで検出した土坑で、東部は攪乱により削平を受ける。平面形は、北東から南西方向に長い長方形を呈する。長辺2.4 m以上、短辺0.9～1.1 m、深さは最深部で約0.15 mある。埋土は黒褐色のシルトである。埋土からは土器小片が数点出土した。

落込み34(図14、図版3) 溝17の東で検出した落込みである。長辺4.8 m以上、短辺1.5～2.0 mの不定形で、東部は攪乱により削平を受ける。深さは最深部で約0.3 mある。埋土は2層に分けられ、上層は暗褐色から黒褐色のシルトが主体で、下層はにぶい黄褐色と暗褐色のシルトが混じり合う。埋土中からは縄文時代晩期頃とみられる土器や弥生時代前期の土器類が出土する。

4. 遺 物

(1) 出土遺物の概要

弥生時代から近代に至る遺物が出土した。遺物の出土量は、整理箱で15箱ある。内訳は、平安時代末期から鎌倉時代初期に属する土器類・瓦類が主体である。

弥生時代の遺物は、溝17や落込み24から前期後半と中期中頃から後半の壺や甕が出土した。この時期の遺物は、後世の盛土層・溝・柱穴など多くの遺構からも出土する。また、縄文系土器の可能性のあるものも少量であるが出土している。

平安時代前期に属する遺物は、後世の遺構から出土した。土師器・須恵器が少量あり、いずれも小片である。

平安時代末期から鎌倉時代初期に属する遺物は、溝12・井戸14・土坑6・柱穴などから多く出土しており、土師器は12世紀末～13世紀初頭に属する。土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦類・石製品・金属製品・木製品などである。輸入陶磁器には白磁碗・青磁皿・鉄釉壺などがある。瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。石製品には、石鍋や砥石片などがあるが、少量に過ぎない。金属製品は、鉄製の椀状容器や釘がある。

室町時代に属する遺物は、盛土層7から出土した。土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦・石製品などがある。土師器皿は、13世紀末～14世紀中頃までのものが含まれるが、12世紀末～13世紀初頭のものも多く混入する。輸入陶磁器には、白磁碗・青磁皿・褐釉陶器壺などが含まれる。石製品には砥石がある。

江戸時代以降に属する遺物は、土坑や盛土層から土製品・焼締陶器・施釉陶器・国産磁器・瓦類などが出土している。江戸時代後期の遺物は、土坑から焙烙・染付磁器・棧瓦などが出土して

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器7点		
平安時代 ～鎌倉時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦		土師器28点、須恵器1点、緑釉陶器1点、焼締陶器1点、輸入磁器2点、軒丸瓦2点、軒平瓦4点、石製品1点、金属製品3点		
室町時代	土師器、瓦器、輸入陶磁器		土師器2点		
江戸時代	土師質土器、国産陶磁器、棧瓦				
近代	国産陶磁器		色絵磁器1点		
合 計		19箱	53点(4箱)	4箱	11箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

いる。他には、土師器皿、肥前や京・信楽系の施釉陶器、肥前磁器などがある。また、明治時代の色絵急須が、第1層（近代盛土層）から出土している。

いずれも小片になったものが多く、図示できる個体は少ない。

(2) 土器類

落込み 34 出土土器（図 15・16 1～3） 1・2は壺の肩部付近で、深めの沈線は5条の単位とみられる。部分的に縦方向のハケ目がある。胎土には細砂～小石を多量に含む。焼成は良好である。内面の磨滅や剥離が激しい。3は壺底部である。底部は未調整、外面は磨滅が激しく調整不明である。底部内面は強いナデの指頭痕が残る。胎土には白色細砂～小礫を多量に含む。焼成は良好である。1・2は畿内I様式新段階に属するとみられる。3は胎土の状態から縄文系土器の可能性もある。

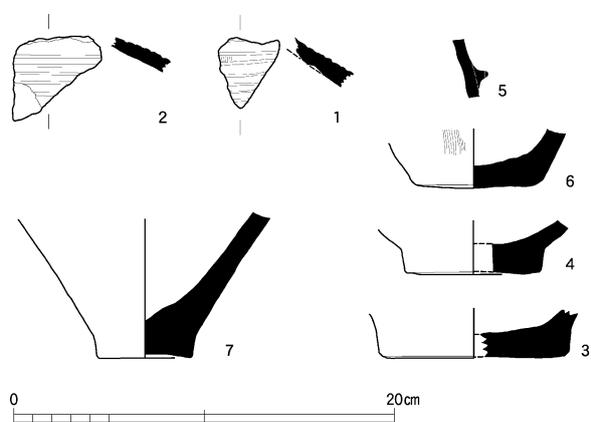


図 15 落込み 34・溝 17 出土土器実測図（1：4）

溝 17 出土土器（図 15・16 4～7） 4は壺の底部である。底部は未調整、外面は磨滅し調整不明である。底部内面は強いナデ痕が残る。胎土には白色細砂～小礫を多量に含む。焼成は良好である。4は縄文系土器である。5は甕の体部で、斜め方向の刻み突帯が付く。内面はナデ。胎土には細砂～粗砂を多量に含む。焼成はやや軟質である。畿内I様式新段階に属するとみられる。6は上層から出土した。壺の底部である。底部は外面

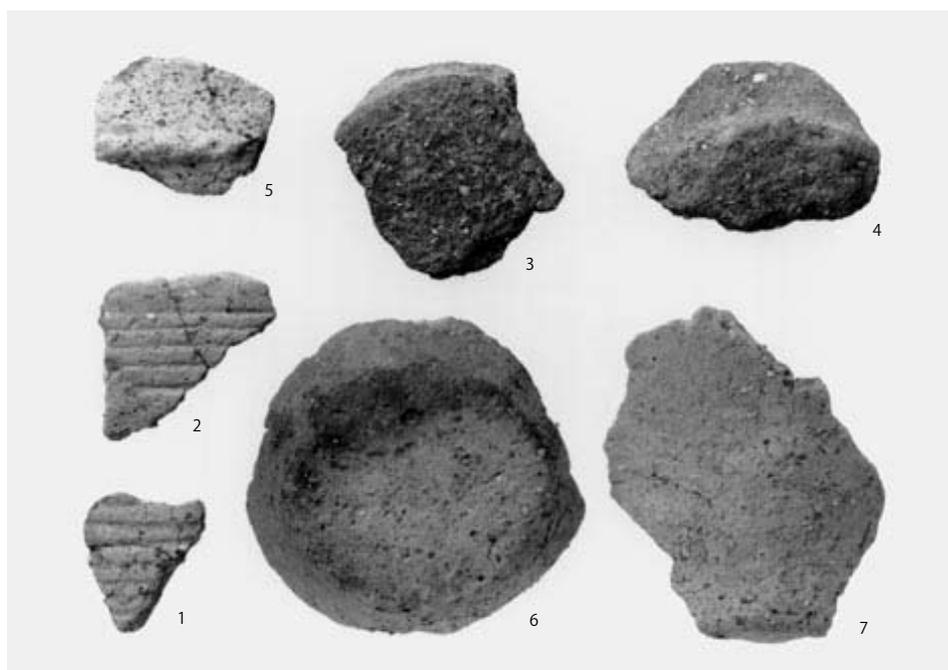


図 16 落込み 34・溝 17 出土土器

は縦方向のハケ目、一部にナデを施す。底部内面は強いオサエとナデの指頭痕が残る。胎土には細砂～小礫を多量に含む。焼成はやや軟質である。部分的に黒色化する。7は壺の底部である。底部外面はややくぼむ。外

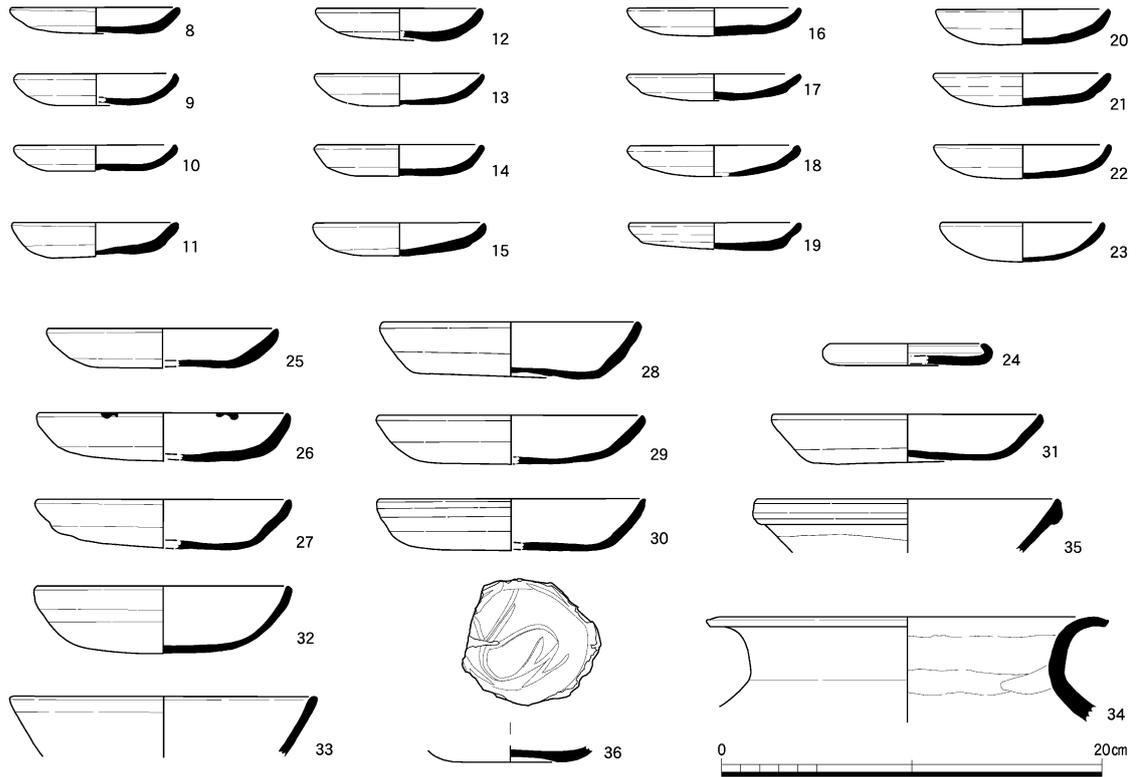


図 17 溝 12 出土土器実測図 (1 : 4)

面は磨滅が激しく調整不明である。底部内面は強いオサエとナデ。胎土には細砂～粗砂を多量に含む。焼成は良好である。6・7は畿内Ⅲ～Ⅳ様式とみられる。

井戸 14 枠内出土土器 (図 18、図版 4 38～40) 38・39は土師器皿 N である。法量には大小の 2 種があるが、大のみ図化した。体部外面上半から口縁部外面に横方向のナデによる浅い凹みが 1 段ある。内面底部は縦方向のナデ。内面口縁部と外面口縁部は横方向のナデ。外面下半と底部はオサエ。38は胎土に白色細粒と金雲母を少量含む。39は胎土に白色細粒を少量含む。ともに胎土は緻密である。焼成は良好である。40は山城産の緑釉陶器の高台部分である。10世紀に属する混入遺物である。

溝 12 出土土器 (図 17、図版 4 8～36) 8～23・25～31は土師器皿 N である。法量は大小の 2 種類がある。大小ともに体部外面上半から口縁部外面に横方向のナデによる浅い凹みが 1 段ある。大は口径 12 cm 台～14 cm 台で 13 cm 台が主体である。器高は 2.6 cm 台である。小は口径 8 cm 台～9 cm 台で 9 cm 台が主体である。器高は 1.8 cm 台である。26は口縁に煤が付着しており灯明皿である。24はコースター形の皿 Ac で、白色系の色調である。32は皿 S で、白色系の色調である。法量は大で深い体部である。33は須恵器鉢の口縁部付近である。体部は斜め上方に直線的にのびる。端部は丸く収め、やや内側に面がある。胎土には白

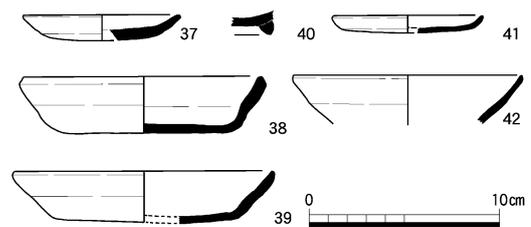


図 18 土坑 6・井戸 14・盛土層 7 出土土器実測図 (1 : 4)



図19 第1層出土色絵急須

色・黒色粒を多く含み、やや粗い。東播系である。34は焼締陶器甕である。口縁部は大きく外反する。口縁部の形状から初期の常滑窯の製品と考えられる。35は白磁椀である。口縁部は玉縁状を呈する。36は青磁皿である。底部内面にクシ描き文を施す。

土坑6出土土器(図18 37)土師器皿Nである。法量は大小の2種類あるが、小のみ図化した。体部外面上半から口縁部外面に横方向の

ナデによる浅い凹みが1段ある。

盛土層7出土土器(図18 41・42)41は土師器皿N小である。器高は0.9cmあり、底部は平坦である。42は土師器皿S大である。胎土は白色系の色調である。小片であるが、口径は12.1cmに復元した。

第1層出土土器(図19 43)色絵の急須である。底部と注口部付近が残る。注口部の反対側に環状の把手が付く。建物・草木・人物の文様を赤色で転写し、赤・青・緑・紫・金で彩色する。明治時代のものである。油小路通蛸薬師下る元本能寺町で同様の意匠の色絵紅茶椀が出土している¹⁾。

(3) 瓦類(図20、図版4)

瓦類は溝12からまとまって出土している。軒丸瓦は2点あり、ともに巴文である。軒平瓦は4点あり、文様は3点が半截宝相華文である。これらの軒瓦は播磨産である。

巴文軒丸瓦(44)右巻きの巴文で、尾は長くつながり界線となる。外区には小粒の珠文を密に配する。瓦当裏面はナデを施す。胎土は精良で、灰色を呈する。焼成は硬質である。

巴文軒丸瓦(45)左巻きの巴文で、巴の断面形状が角張る。尾は長くつながり界線となる。外

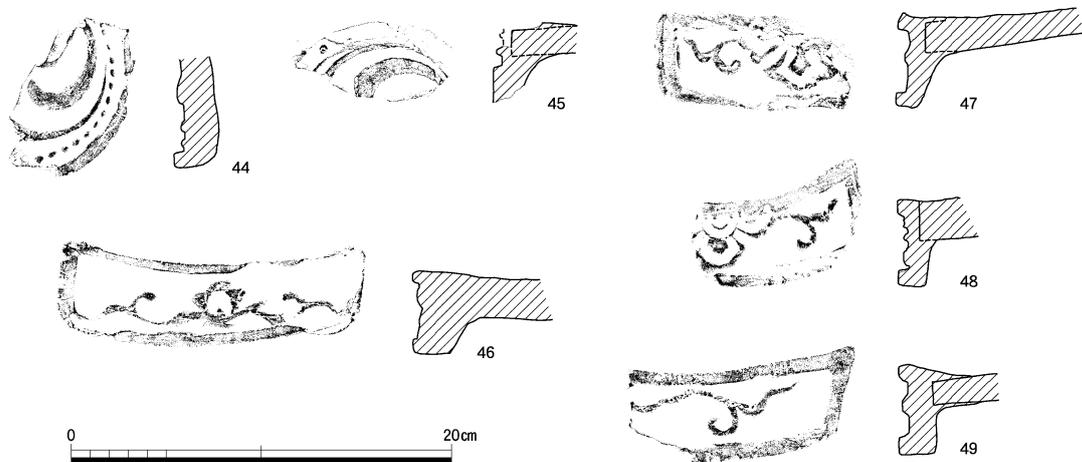


図20 出土軒瓦拓影・実測図(1:4)

区にはやや小粒の珠文をやや密に配する。巴の頂部は平坦で、ヘラミガキが施される。瓦当裏面は横方向のナデ、丸瓦凸面は縦方向のナデを施す。胎土は精良で、灰色を呈する。焼成は硬質である。

半截宝相華文軒平瓦（46）瓦当面に半截した下から上に向かう宝相華文を表す。小型の軒平瓦で、幅は 16.2 cmある。瓦当上部は横方向のナデ、顎部は横方向のケズリ、瓦当裏面は横方向のナデ、平瓦凸面は縦方向のナデを施す。胎土は精良で、灰色を呈する。焼成は硬質である。

半截宝相華文軒平瓦（47）右半を欠く。上から下に向かう半截宝相華文である。左側端部はあまり上反しない。胎土は精良で、灰色を呈する。焼成は硬質である。類似する半截宝相華文の軒平瓦が左京四条一坊跡²⁾で出土している。

半截宝相華文軒平瓦（48）左半を欠く。上から下に向かう半截宝相華文である。右側端部は強く弧を描くように上反する。胎土は精良で、灰色を呈する。焼成は硬質である。

唐草文軒平瓦（49）左半を欠く。瓦当面と平瓦部凹面にハナレ砂が付着する。胎土は精良で、灰色を呈する。焼成は硬質である。

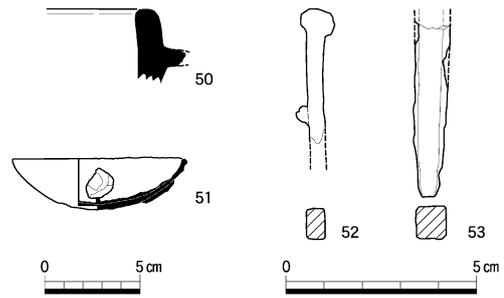


図 21 溝 12 出土石製品・金属製品
実測図（1：4、1：2）

（4）その他の遺物（図 21）

溝 12 から出土した石製品や金属製品がある。石製品には滑石製の羽釜がある。金属製品には、鉄製の蓋状製品と釘がある。木製品には井戸杵があるが、腐蝕が激しく図化はできなかった。

羽釜（50）口縁部と鏝の部分である。外面に煤が付着する。鏝の先端を欠くが、断面形は台形になるとみられる。滑石製である。

蓋（51）椀状を呈する鉄製品である。腐蝕が激しく表面の状態は不明である。底部内面の中央部に鉄製の突起が付く。これをつまみと想定すれば、蓋と考えられる。

釘（52・53）52 は釘の頭部である。断面は長方形である。53 は釘の先端部である。断面は正方形である。

註

1) 『京焼 みやこの意匠と技』京都国立博物館 2006 年

2) 『平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊—』平安京調査会 1975 年 図版七二 軒平瓦 T36

5. ま と め

今回の調査地において検出した遺構・遺物は、弥生時代、平安時代末から鎌倉時代初頭、室町時代以降の大きく3時期に分けられる。以下では、その成果について簡単にまとめた。ついで、平安京内で検出されている方形周溝墓についても概観してみる。

(1) 遺構の変遷

弥生時代

当地はこれまで弥生時代遺跡の空白地であったが、今回の調査で弥生時代前期後半の落込み、中期中頃から後半に属する溝と土坑を検出した。当地周辺での既往の調査成果をみても、弥生時代の遺構・遺物の検出例は少なく、さらに遺物はほとんどが流路堆積層からの出土であった。しかし、今回の一連の遺構を検出したことによって、当地に弥生時代における生活の痕跡があることが判明したことは、大きな調査成果であるといえる。

また、検出した溝と土坑の配置関係からは、方形周溝墓の周溝と埋葬主体部である可能性が考えられる。これが方形周溝墓であるならば周溝の一辺は9 m以上あり、溝幅1.2 m、深さ0.5 mの規模を確認できたことになり、当地が弥生時代中期には墓域として利用されていた可能性がある。

周辺には西方向に衣田町遺跡、南西方向には唐橋遺跡などの弥生時代の遺跡があり、当地は両遺跡から0.6～0.7 kmの距離にあたる。後述するが、本調査地近辺においても、弥生時代に属する遺構や遺物が出土していることから、独立した遺跡としてとらえる必要があろう。

平安時代前期

平安京左京七条一坊四町跡に位置し、平安京の迎賓施設として設置された東鴻臚館が存在した時期にあたる。この時期の遺物は、後世の遺構に混入して少量であるが、土師器・須恵器などが出土した。しかし、この時期に該当する遺構は、検出することができなかった。その理由としては、まず、近・現代の攪乱によって広い範囲が削平されていたことがあげられる。また、南北2町占地の東鴻臚館内の建物配置は不明であるが、同南半部の西寄りにあたる当調査地は、敷地内の空闲地であった可能性も考えられる。

平安時代末から鎌倉時代初頭

四町内の西部における平安時代末から鎌倉時代初頭の宅地利用の一端を知ることができた。調査区の南部で検出した東西方向の溝12は、四町内の南北中心線から約10 m南寄りに位置している。この溝は東端で南折していることを確認している。さらに、埋土の状態から水が溜まっていた時期があったことがわかった。溝の南肩付近では小型軒平瓦がまとまって出土しており、これらは南側から投棄もしくは落ち込んだと考えられる。この溝は上部が攪乱により削平されているものの、復元すると、幅約2.5 m、深さ約1.5 mの大規模な溝になるとみられる。これらを勘案すれば、調査区南側にあたる四町の西寄りの南半部に、溝12に区画され、小型の軒平瓦を用いた建物などの施設が想定できる。

一方、溝 12 の北肩部からは、この時期の土師器皿が多く出土している。これらは北側からの投棄が考えられる。さらに、北側で井戸や建物としては復元できないものの、柱穴を検出していることから、調査区北部が居住域であったと考えられる。また、井戸 14 の西側の小規模な柱穴は、井戸の覆い屋に関連する可能性もある。

これまでの調査により周辺では、平安時代末から鎌倉時代初頭に遺構数が増加する傾向が多くみられることが分かっている。右京六条一坊六町の調査¹⁾では、ほぼ同時期の宅地内に設けられた御堂が検出されている。しかし、今回は居住域と特殊な建物などの施設が大規模な溝で画されている状況がみられ、多様な土地利用の一端を窺うことができた。

桃山時代

調査区北部で検出した盛土層は、締まりの弱い堆積状況が観察できることから、短期間で積み上げられた盛土層とみられる。盛土層内から出土する最も新しい土器類は室町時代（14 世紀半ば）のものであるが、ここを御土居堤の基底の一部と推定できる。さらに検出位置も遺跡地図の御土居推定位置に合致していることから、このことを補完できる。

さらに、調査地西隣の道路面が当地より 0.8 m 低い状態を呈していることから、ここが御土居の濠にあたるとみられる。

(2) 平安京内の弥生時代遺跡について

京都盆地周辺には、桂川流域、鴨川流域、盆地中央部、小丘陵を隔てた山科盆地などで多くの弥生時代の遺跡が確認されている。また、盆地中心部においても遺構・遺物の検出例が多く報告されている。

現在のところ、平安京内の範囲内において、弥生時代の遺跡は 14 箇所が周知されている。遺跡には集落跡と把握されているものと散布地として認識されているものがあり、上京区の二条城北遺跡・内膳町遺跡・烏丸丸太町遺跡、中京区の西ノ京遺跡・壬生遺跡・堀川御池遺跡・烏丸御池遺跡、下京区の烏丸綾小路遺跡・衣田町遺跡、南区の唐橋遺跡・烏丸町遺跡、右京区の山ノ内遺跡・西院遺跡・西京極遺跡がある。これらの遺跡内では、竪穴住居・土坑・溝・流路などが検出され、多くの遺物も出土している。

これらの遺跡の中で、方形周溝墓を検出したものには、烏丸綾小路遺跡・衣田町遺跡・西京極遺跡・山ノ内遺跡の 4 箇所がある。烏丸綾小路遺跡は、弥生時代から古墳時代まで継続する集落跡である。弥生時代の竪穴住居跡・方形周溝墓・土坑・溝・流路などを確認している。東西 1.3 km、南北 1.2 km の規模である。衣田町遺跡は、弥生時代から古墳時代までの遺物が出土する散布地である。弥生時代の方形周溝墓・竪穴住居と考えられる落込みなどを確認している。東西 0.9 km、南北 0.9 km の規模である。西京極遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての集落跡である。弥生時代の竪穴住居跡・方形周溝墓・溝・土坑・落込み・湿地状堆積などを確認している。東西 0.7 km、南北 0.8 km の規模である。山ノ内遺跡は、弥生時代から古墳時代までの遺物が出土する散布地である。弥生時代の方形周溝墓・掘立柱建物・溝・土坑などを確認している。東西 0.6 km、南北 0.5 km の規

模である。方形周溝墓は今後の調査により、さらに増加する可能性が高いとみられる。

図 22 は、平安京内にこの時期に該当する遺跡範囲を表し、さらに、今回の調査地周辺の 4 つの坊の範囲内（左京七条一坊・八条一坊、右京七条一坊・八条一坊）での弥生時代の遺構・遺物を検出した地点を記した。この図を基に、周辺において実施された弥生時代に関する成果のある調査例を検討する。

調査 1 は、左京七条一坊二町跡の立会調査である。弥生時代後期から古墳時代の土器、縄文時

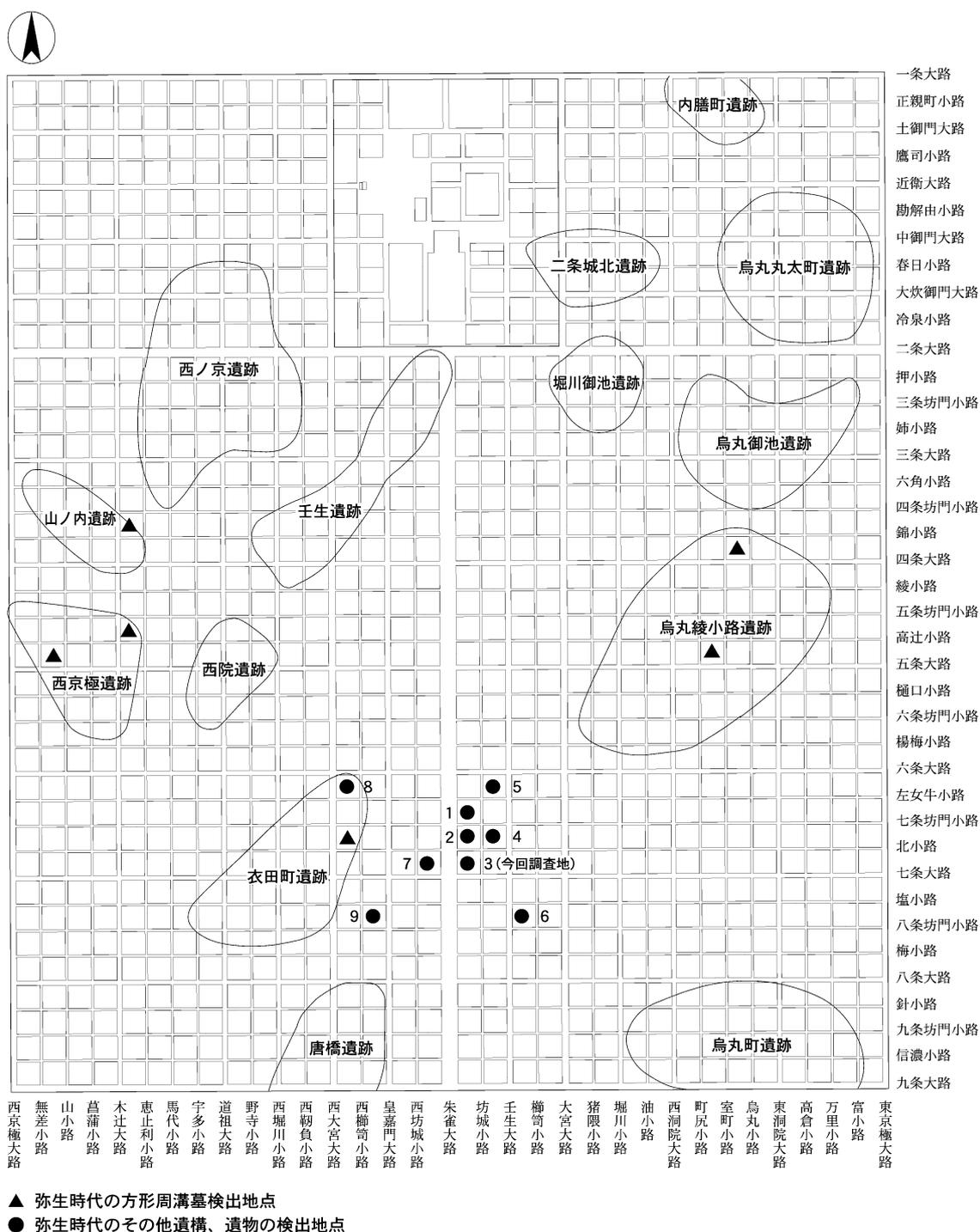


図 22 平安京域内弥生遺跡分布図

代の土器が少量出土した。調査2は、左京七条一坊三町跡の立会調査である。地表下1.72 m以下で、弥生時代の遺物を含む湿地堆積を検出した。調査3は、左京七条一坊四町跡の発掘調査である。弥生時代中期の溝と土坑を検出した。方形周溝墓の可能性もある。調査4は、左京七条一坊六町跡の立会調査である。地表下0.55 mで、弥生時代の土坑を検出した。調査5は、左京七条一坊八町跡の発掘調査である。弥生時代前期の流路を検出した。調査6は、左京八条一坊十町跡の発掘調査である。弥生時代後期の弥生土器（壺・甕）、古墳時代中期の須恵器（壺・甕・蓋）、土師器甕が出土した。調査7は、右京七条一坊四町跡の発掘調査である。縄文時代中期の縄文土器（深鉢）、弥生時代前期の弥生土器（鉢・壺）・石包丁、古墳時代の土師器（甕・壺・高杯）が出土した。調査8は、右京七条一坊十六町跡の試掘調査である。地表下0.8 mで、弥生時代の遺物包含層を検出した。調査9は、右京八条一坊十町跡の立会調査である。地表下1.08 mで、弥生時代または縄文時代の流路を検出した。

このように、調査地周辺の4つの坊の範囲内での弥生時代の遺構・遺物を検出した地点は9地点に及んでいる。このうち当地周辺の6地点は近接しており、東西0.5 km、南北0.7 kmの範囲に集中していることがわかり、新たに当地周辺に弥生時代の遺跡が存在する可能性を指摘することができる。

註

- 1) 平尾政幸・山口 真・永田宗秀『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所 発掘調査概報 2002-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年

文献(図22に文献番号が対応する)

- 1 「左京七条一坊跡試掘調査(No447)」『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和54年度』京都市文化観光局文化財保護課 1980年
- 2 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 3 本報告
- 4 「主要な出土遺物」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
- 5 永田宗秀・藤村敏之「平安京左京七条一坊」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 6 磯部 勝「左京八条一坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 7 平田 泰・吉川義彦・菅田 薫「右京七条一坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 8 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
- 9 「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年

表4 掲載土器観察表

番号	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色調	備考
1	弥生土器	壺	落込み34				10YR7/3にぶい黄橙色	5条単位の沈線 胎土はやや密
2	弥生土器	壺	落込み34				10YR7/3にぶい黄橙色	5条単位の沈線 胎土は密
3	弥生土器	壺	落込み34			9.4	2.5YR5/6赤褐色	底部 胎土はやや粗い 20%残
4	弥生土器	壺	溝17			7.0	2.5YR6/6橙色	底部 胎土はやや粗い 20%残
5	弥生土器	甕	溝17				10YR8/2灰白色	突帯に刻み目 胎土は密
6	弥生土器	壺	溝17			6.3	7.5YR8/4浅黄橙色	底部 胎土はやや密
7	弥生土器	壺	溝17			4.9	7.5YR7/4にぶい橙色	底部 胎土はやや密
8	土師器	皿N	溝12	8.0	1.4		7.5YR7/4にぶい橙色	口縁部と内面はナデ 外面はオサエ
9	土師器	皿N	溝12	8.7	1.7		10YR8/2灰白色	口縁25%残
10	土師器	皿N	溝12	9.0	1.4		5YR7/4にぶい橙色	口縁25%残
11	土師器	皿N	溝12	8.8	1.9		7.5YR7/4にぶい橙色	口縁60%残
12	土師器	皿N	溝12	8.9	1.8		10YR7/3にぶい黄橙色	口縁40%残
13	土師器	皿N	溝12	9.0	1.7		10YR7/3にぶい黄橙色	口縁65%残
14	土師器	皿N	溝12	9.0	1.7		10YR8/2灰白色	底部に径6mmの穿孔 口縁50%残
15	土師器	皿N	溝12	9.1	1.8		7.5YR8/4浅黄橙色	口縁80%残
16	土師器	皿N	溝12	9.2	1.5		10YR8/2灰白色	口縁50%残
17	土師器	皿N	溝12	9.2	1.4		7.5YR8/3~8/4浅黄色	口縁40%残
18	土師器	皿N	溝12	9.2	1.7		7.5YR7/4にぶい橙色	口縁40%残
19	土師器	皿N	溝12	9.2	1.5		7.5YR7/4にぶい橙色	口縁70%残
20	土師器	皿N	溝12	9.2	1.9		7.5YR7/3にぶい橙色	口縁95%残
21	土師器	皿N	溝12	9.4	1.8		10YR8/4浅黄橙色	口縁85%残
22	土師器	皿N	溝12	9.4	1.8		10YR7/3にぶい黄橙色	口縁80%残
23	土師器	皿N	溝12	8.7	2.1		7.5YR7/4にぶい橙色	口縁40%残
24	土師器	皿Ac	溝12	9.0	1.1		10YR8/2灰白色	口縁25%残
25	土師器	皿N	溝12	12.2	2.0		10YR7/2にぶい黄橙色	口縁20%残
26	土師器	皿N	溝12	13.4	2.6		10YR8/2灰白色	口縁に煤付着 灯明皿 口縁40%残
27	土師器	皿N	溝12	13.5	2.7		10YR8/4浅黄橙色	口縁40%残
28	土師器	皿N	溝12	13.8	3.0		7.5YR7/4にぶい橙色	口縁100%残
29	土師器	皿N	溝12	14.2	2.6		7.5YR8/4浅黄橙色	口縁30%残
30	土師器	皿N	溝12	14.2	2.7		7.5YR7/3にぶい橙色	口縁40%残
31	土師器	皿N	溝12	14.3	2.6		7.5YR7/4にぶい橙色	口縁50%残
32	土師器	皿S	溝12	13.6	3.6		2.5Y8/2灰白色	口縁30%残
33	須恵器	鉢	溝12	16.0			10YR7/1灰白色	口縁10%残 東播系
34	焼締陶器	甕	溝12	21.2			断面 10YR7/1灰白色 器表 2.5YR3/4暗赤褐色	常滑窯製品 口縁20%残
35	白磁	椀	溝12	16.3			断面 2.5Y8/2灰白色 釉 5Y6/2灰オリーブ色	口縁は玉縁状 外面体部過半は露胎
36	青磁	皿	溝12				断面 10YR7/1灰白色 釉 5Y6/2灰オリーブ色	底部内面にクシ描き施文 同安窯
37	土師器	皿N	土坑6	8.3	1.3		7.5YR7/4にぶい橙色	口縁35%残
38	土師器	皿N	井戸14	13.0	3.0		10YR7/2にぶい黄橙色	口縁100%残
39	土師器	皿N	井戸14	13.8	2.7		10YR8/4浅黄橙色	口縁100%残
40	緑釉陶器	椀	井戸14				断面 2.5YR7/1灰白色 釉 オリーブ灰色	高台部のみ 混入
41	土師器	皿	盛土層7	8.0	0.9		10YR7/4にぶい黄橙色	口縁35%残
42	土師器	皿	盛土層7	12.1			10YR8/1灰白色	口縁15%残
43	磁器	急須	第1層		7.2	6.9		色絵

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしちじょういちぼうよんちょうあと・おどいあと							
書名	平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-1							
編著者名	小檜山一良・尾藤徳行							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 しちじょういちぼうよんちょうあと 七条一坊四町跡 おどいあと 御土居跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 すざくしょうかいちょうちない 朱雀正会町地内 1-20	26100	149	34度 59分 23秒	135度 44分 37秒	2009年3月 9日～2009 年4月30日	355m ²	公共職業 安定所 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 七条一坊四町跡 御土居跡	都城跡	弥生時代	溝、土坑、落込み	弥生土器		弥生時代前期の落 込みを検出した。 弥生時代中期の溝 と土坑は方形周溝 墓の可能性がある。		
		平安時代 ～鎌倉時代	溝、井戸、土坑、 柱穴	土師器、須恵器、緑釉 陶器、瓦器、輸入陶磁 器、焼締陶器、軒丸瓦、 軒平瓦、丸瓦、平瓦、 石製品、金属製品		平安時代末から鎌 倉時代初期の溝、 井戸、柱穴、土坑 を検出した。		
		桃山時代	盛土層	土師器、瓦器、輸入陶 磁器		御土居基底部とみ られる。		
		江戸時代	土坑	土師質土器、国産陶磁 器、棧瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-1
平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡

発行日 2009年6月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961